

親子関係の類型

——親子関係診断尺度 EICA——

辻岡美延*・山本吉廣**

親子関係についての研究は多方面にわたり、またその数も多い。しかしながら、親の子に対する態度・行動を、①操作的・測定論的に定義されいくつかの主要次元としてこれをとらえ、②それらの次元を客観的に測定しうる測定尺度を構成し、さらに③それらの測定尺度によって親子関係の様態をいくつかの類型に分類しようとする試みは数少ない。

親子関係の類型について、たびたび引用される古い研究としては、Symonds, P. M. (1939) による「過保護」、「残忍」、「無視」と「甘やかし」の4類型についての提案があり、この類型化の背後には「受容—拒否」と「支配—服従」という親の子に対する態度・行動の2つの主要次元が想定されていた。しかし、彼のこれらの次元は必ずしも測定論的に明確な基盤を持たない所謂理念的枠組からの産物であった。

一方、Roff, M. (1949) の“The Fels Parent Behavior Scales”の分析に端を発する親子関係の因子分析的研究は、親の子に対する態度・行動を調べるテストの尺度構成とその主要次元の解明とが中心となっていた。この点に関し、Schaefer, E. S. (1965 a, 1965 b) は、“Children's Reports of Parental Behavior Inventory (CR—PBI)”を発表し、その後いくつかの追試的研究（例えば Renon, G. J. et al. 1968, 小嶋 1967 など）によって、「受容対拒否」、「心理的自律性対心理的統制」そして「厳しい統制対甘い統制」と名付けられる3因子が見出されてきた。Schaefer の研究の追試的研究のうち、本邦における小嶋の研究は測定論的に最も周到な計画の下に行われた研究と言えよう。しかし、氏の研究は、CR—PBI の尺度構成の検討およびその洗練化 (1969, 1970, 1975) や CR—PBI で測定された親の養育行動と子どもの人格特性 (1967)、知的機能 (1971) および学業成績 (1973) など所謂外部変数との関連性の検討へと精力的に進められて来たが、その研究成果に基づいて親子関係の類

型化というような具体的な作業段階までは進んでいない。

一方、Heilbrun, A. B., Jr. et al. (1966, 1967) は、子に対する母親の行動は、「統制対自律性の承認」と「養護対敵対心」の2次元に還元されるとし、前者の測度として PARI (Parent Attitude Research Instrument, Schaefer, E. S. & Bell, R. Q. 1958) を、後者の測度として Parent-Child Interaction Rating Scales (Heilbrun, A. B., Jr. 1964) を用い、それら2尺度の尺度得点の中央値によって被験者をそれぞれ二分割し、「過保護（高統制で高養護）」、「拒否（高統制で低養護）」、「受容（低統制で高養護）」そして「無視（低統制で低養護）」の4類型を考えた。

山下俊郎のグループは、親子関係診断テストの作成を意図し、昭和32年以来共同研究を行い、八重島・三浦ら (1962) は、項目変量間相関行列 (48×48) の因子分析によって見出された①細部関与、②垂直的親愛、③情動、④水平的親和の4因子を尺度構成の出発点とし、何度かの改訂によって項目を逐次改善し、三浦ら (1970) によって PCR 検査なる尺度が作成され、最終的には4つの因子は①過保護干渉の態度、②許容寛容の態度、③感情的態度、④民主的態度と名付けられ、因子別に YG 性格検査の5類型 (A, B, C, D, E の各類型) との関連性が検討された (三浦ら 1971)。しかし、彼らの分類は一変量解析的な因子毎の尺度得点による分類にすぎないため、親子関係を総合的に把握するところまでには至っていない。

一方、また古川 (1972) は60項目からなる親子関係に関する質問紙を作成し、その項目間相関のセントロイド法により2因子を抽出し、三隅の PM 理論に準拠して、この2因子を集団の課題解決ないし目標達成を志向する“Performance” (P 機能) と集団の自己保存ないし維持・強化を志向する“Maintenance” (M 機能) と命名し、この2因子を代表する尺度を構成し、その尺度得点の平

*, ** 関西大学社会学部

均点で2分割することにより、PM, P, M, pm という4類型に親の行動を分類している。しかし、彼女の類型化は尺度得点の細かい段階によって分類を行うという段階にまでファインされたものではなく、やはり理念的分類の段階に留まっている。

以上のような経過をふまえて、辻岡・山本 (1975 a, 1975 b) はまず Schaefer, E. S. の CR—PBI の Form—I (26尺度・260項目) と Form—II (18尺度・192項目) の因子分析により、親子関係の主要次元として下記の通りの4種の一次因子が存在することを証明した。

1. 情緒的支持 ES (Emotional Support)

これは、子どもが、自分の父 (または母) は子ども自身を支持していると認知する傾向を調べるものである。

2. 同一化 ID (Identification)

これは、子どもが、自分の父 (または母) は子ども自身と一体感をもち、意識の底で子どもを親自身と同一化し、自分の延長あるいは分身として子どもを認知していることを、子ども自身もまた感じ取る傾向をとらえるものである。所謂親子の肉身間の「へその緒」によって象徴される親子の臍帯的な結合の強度を測定するものである。

3. 統制 CO (Control)

この次元は、親の子どもへの統制、しつけ、訓育、勉学等へのきびしさ、すなわち親からの超自我の圧力を子どもがいかに認知しているかを調べるものである。

4. 自律性 AU (Autonomy)

これは、子どもの人格を認め、自主性を尊重し、子どものことは子ども自身に任せようという親の態度・行動を子どもがいかに認知しているかを調べるものである。

そして結果的には、これらの一次因子の4次元を測定するための尺度が、「因子的真実性の原理」(辻岡, 1964, Cattell, R. B. & Tsujioka, B. 1964) によって構成され、『親子関係診断尺度 EICA』と名付けられるテストが発表された (辻岡・山本 1976 b)。ここでいう因子的真実性の原理 (principle of factor trueness) とは項目粗得点の合成方向 (構成尺度の方向) が、因子分析によって得られた因子軸の方向に可能な限り一致するように、しかも当該因子以外の欲せざる因子の因子分散を可能な限り抑制するように項目分析が行われる方法である。このような項目分析の作業はコンピュータなしには極めて莫大な労力を必要とするから、この作業を遂行するために、辻岡・清水 (1975 a, 1975 b) により、項目分析のためのコンピュータ・プログラムが考案された。なお、EICA 作成のための項目分析では、息子→父、息子→

母、娘→父、娘→母のいずれの親子関係においても因子的真実性の原理が満足されるように、項目分析の交差妥当化が行われ、所謂尺度の転移可能性 (transferability) も検証された (辻岡・山本 1976 a)。

本論文では、これらの研究結果に基づいて作成された親子関係診断尺度 EICA により、個々の子ども自身が両親の行動をいかに認知しているかを、“親子関係診断座標”とよぶ認知図 (cognitive map) を作成することにより、親子関係の客観的類型化を計る、①コンピュータ判定法と②テスト用紙中に組込まれた簡便法との二法を併行的に説明したいと考える。

方 法

辻岡・山本 (1976 a, 1976 b) の構成した親子関係診断尺度 EICA を中学2年生と3年生 (男子437名、女子398名、合計835名) に施行した結果をもとに類型化の作業を説明したい。

1. 親子関係プロフィールの作成

両法とも、まず親子関係のプロフィールを作成する。これは、父および母についての各4尺度得点 (粗点) を、①コンピュータ法では標準化資料に従って、父母別個に求めた2種類の正規化標準得点 (normalized standard score) に変換し、その得点を尺度ごとにプロットすることにより FIG. 1 のようなプロフィールを作成する。作図としては同一基線上に F (father), M (mother) の文字を用いて独立に記入し、もし同一尺度の父母の得点が同一得点を示した場合は、P (parents) の1文字によって表わすことにしてある。一方、②の簡便法ではプロフィール上に記入された0~20までの粗点の数字のうち、各尺度得点に合致するものを逐次○で囲んで行くことにより、正規化標準得点 (スタナイン得点) への変換とプロフィール作成が同時に、しかも父母別に完成される (FIG. 2)。

プロフィール内での ES, ID, CO, AU の各一次因子尺度の方向は、二次因子の受容性および統制性の高得点側が右へ揃うよう、テスト用紙中では AU 尺度得点のみ自律性の“否定”の側が自動的に高得点側となるように採点される。これは、二次因子得点の近似値をテスト用紙中で算出することを容易にするためにとった処置である。

TABLE 1 には、男女別および判断対象別 (父母別) と男女込み判断対象別、さらに全サンプルの尺度毎の平均および標準偏差を示した。尺度毎の性別、判断対象の2要因の分散分析の結果によると (紙面の制約からその

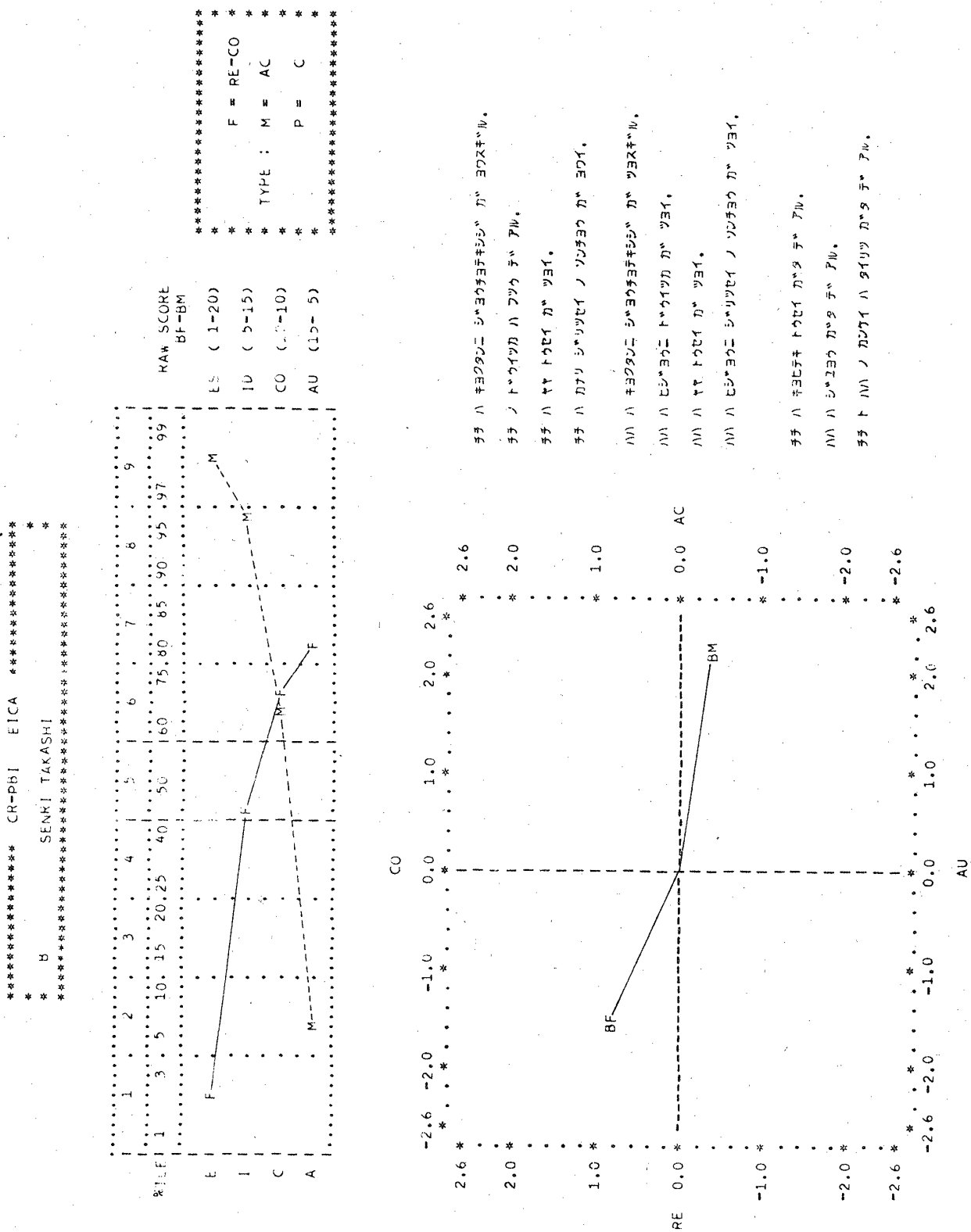


FIG. 1 Computer Output of EICA

結果は掲載できないが), 各尺度平均の性別による差違よりも, むしろ判断対象が父か母かによる差違の方が4尺度に一貫して顕著であるため, 標準化の作業は, 被験者の性別よりもむしろ対象別に行うことにした。

TABLE 1 Means and standard deviations of EICA's 8 scales

		ES	Father ID	CO	AU
Boy (437 Ss)	$\bar{X}$	10.62	6.22	7.66	10.81
	σ	4.15	3.99	4.42	4.16
Girl (398 Ss)	$\bar{X}$	10.47	6.72	7.04	11.58
	σ	4.80	4.34	4.19	4.08
Boy & Girl (835 Ss)	$\bar{X}$	10.55	6.46	7.37	11.18
	σ	4.77	4.17	4.32	4.14
		ES	Mother ID	CO	AU
Boy (437 Ss)	$\bar{X}$	12.20	7.08	7.88	11.54
	σ	4.39	4.10	4.34	4.10
Girl (398 Ss)	$\bar{X}$	12.20	7.81	8.09	12.34
	σ	4.30	4.17	4.35	3.91
Boy & Girl (835 Ss)	$\bar{X}$	12.57	7.43	7.98	11.92
	σ	4.36	4.15	4.34	4.03
		ES	Father & Mother ID	CO	AU
Total (835 × 2 Ss)	$\bar{X}$	11.56	6.94	7.67	11.55
	σ	4.68	4.19	4.34	4.10

2. 親子関係診断座標の作成

①のコンピュータ判定法では, 全被験者(835名)の父と母についての報告を込みにした全サンプル(835名 × 2)の尺度間相関行列(4 × 4)を次元数を2として主成分分析し, 2個の主成分因子得点を求める。得られた因子負荷量行列(A)より, 主成分因子得点(F)を求める公式は,

$$(1) F = ZA(A'A)^{-1}$$

によった。なお上式のZは全サンプルの4尺度の標準得点行列であり, 判断対象が父であるか母かの別なく, 全サンプルの平均, 標準偏差が用いられた。これは, 後述するように同一空間上における父と母の位置関係を問題とする組合せ類型を考えるためである。

ここで算出された2個の因子得点は, 辻岡・山本(197

5 a) の二次因子分析で抽出された二次因子の「受容性—拒否性」(Acceptance—Rejection)と「統制性—自律性」(Control—Autonomy)に対応するもので, この因子得点の平均は0で標準偏差は1の標準形式に計算されている。そこで, 両因子得点の平均を原点とし, 「受容性—拒否性」(AC軸)を横軸に, 「統制性—自律性」(CO軸)を縦軸にとると, 2個の因子得点はこの二次元直交座標上の点座標を表現することになる。すなわち, 父親と母親のAC因子得点をそれぞれACfとACm, 父親と母親のCO因子得点をそれぞれCOfとCOMとすると, 父親は(ACf, COf), 母親は(ACm, COM)という座標をもつことになる。

父はF, 母はMで表現し, 被験者が男子である場合は前にBをつけ, BF, BM, 女子である場合は, GF, GMのように2文字でそれぞれの座標を示すことにしてある。ただし, プロフィールと同様に, 父と母の座標すなわち因子得点が作図上の誤差の範囲で等しくなった場合には, BPあるいはGPのように表現することとした。

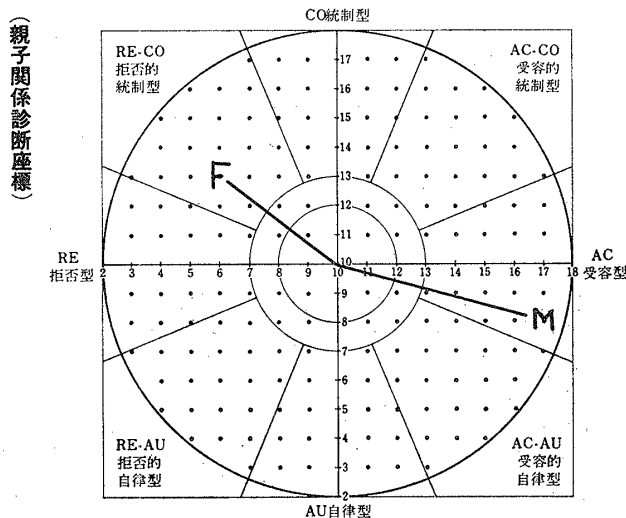
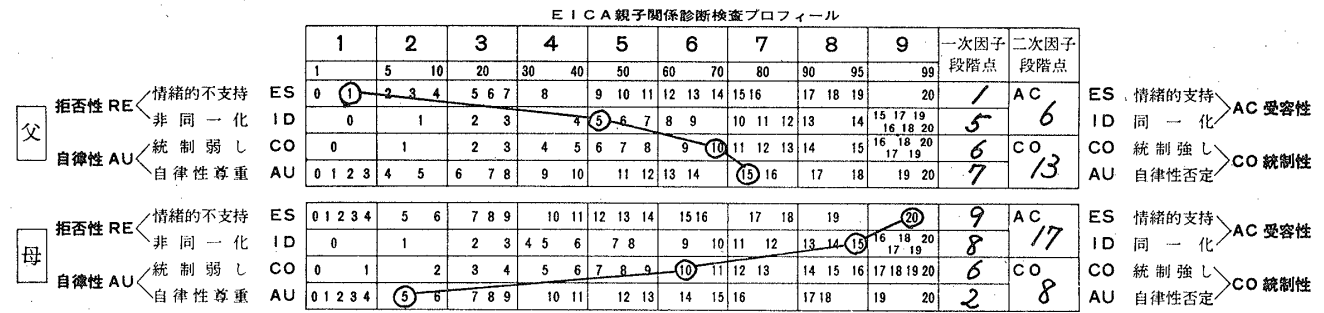
このFIG. 1の直交軸は単に概念的に直交(conceptually orthogonal)であるのみならず, 4尺度間相関を主成分分析したところ, TABLE 2のように単純構造性の高い直交成分が得られるので, 2因子得点は統計的にも直交(statistically orthogonal)である。

TABLE 2 Factor-loadings and weights of 4 scales on second-order principal components (N=835 × 2)

	Factor-loadings		Weights	
	AC	CO	AC	CO
ES	.868	-.023	.541	-.017
ID	.888	.087	.553	.064
CO	.136	.833	.085	.618
AU	-.212	.803	-.132	.596

一方, ②の簡便法による二次因子得点とは, 一次因子尺度得点をスタナイン得点に変換し, それぞれESとIDの, COとAUのスタナイン得点を合計したものである。このスタナイン得点への変換は, テスト用紙中のプロフィールの9段階に分割された領域のいずれに各尺度得点(粗点)が属しているかにより, プロフィール最上段の1~9の数字を, そのままプロフィール右の一次因子段階点記入欄へ転記することにより簡単に行われる。(FIG. 2参照)

テスト用紙を用いた簡便法において, スタナイン得点の単純合計を二次因子段階点としたことは, TABLE 2



の重み行列を視察すればわかるとおり、二次因子の「受容性—拒否性」(AC) に対しては、ES 尺度に 0.541, ID 尺度に 0.553 の、そして CO 尺度と AU 尺度に対してはほとんど無視しうる程度の重みしか存在しないからであり、同様にまた、二次因子の「統制性—自律性」(CO) に対しても、ES 尺度と ID 尺度は無視しうる重みで、CO 尺度に 0.618, AU 尺度に 0.596 のほとんど等しい重みがかかっているからである。

なお、コンピュータ法による二次因子得点と簡便法に

TABLE 3 Correlations between secondary factor scores by computer method and manual method (N=835)

		Computer method				Manual method			
		AC	CO	AC	CO	AC	CO	AC	CO
Father	AC	1.000	-.023	.609	.033	.979	-.070	.606	.004
	CO	-.023	1.000	.009	.600	.023	.988	.034	.593
Mother	AC	.609	.009	1.000	-.013	.589	-.020	.982	-.058
	CO	.033	.600	-.013	1.000	.067	.594	.028	.987
Father	AC	.979	.023	.589	.067	1.000	-.021	.598	.041
	CO	-.070	.988	-.020	.594	-.021	1.000	.009	.592
Mother	AC	.606	.034	.982	.028	.598	.009	1.000	-.013
	CO	.004	.593	-.058	.987	.041	.592	-.013	1.000

FIG. 2 Profile and Diagnostic Chart of the EICA Parent-Child Relations Questionnaire

よる二次因子段階点との相関は、「受容性—拒否性」(AC) においては、父親では 0.979, 母親では 0.982, 「統制性—自律性」(CO) においては、父親では、0.988, 母親では 0.987 である (TABLE 3)。また、コンピュータ法による二次因子間の相関は、父母を合併した全サンプルでは他の因子に対する相関は完全に 0 であるが、TABLE 3 のように父母別に示すと完全には 0 とはならず、若干の相関を有するが (-0.023, -0.013), この値は簡便法による相関値ともきわめて近似し (-0.021, -0.013), この簡便法はコンピュータによる精密計算にほとんど近似することがわかる。

3. 単独類型

上述したように、父親と母親の結果は二次元座標上の 2 点 F(ACf, COf), M(ACm, COM) として定まる。そこで、この二次元座標面を、原点を中心として 45° ずつに 8 等分し、その上原点を中心として因子得点で 0.5 (1/2σ) と 0.75 (3/4σ) の半径で同心円を 2 つ描き、FIG. 3 のように合計 10 個の領域を定め、父あるいは母について

の座標上の位置がこの領域のどこに占めているかにより 10 の類型を考える。これを親子関係における父母の単独類型とよぶ。簡便法では、同心円の半径は 2 点 (正規化標準得点の 1/2σ に該当) と 3 点 (3/4σ に該当) となっているが、類型判定の作業は、テスト用紙の親子関係診断座標中の F および M の位置が 10 の領域のどこに存在するかさえを読みとればすぐさま判定が完了する、(FIG. 2)。

コンピュータ法での類型判定の手続はやゝ複雑である。今、FIG. 4 のように、父親と母親の二次元座標上の位置が定まった時、原点

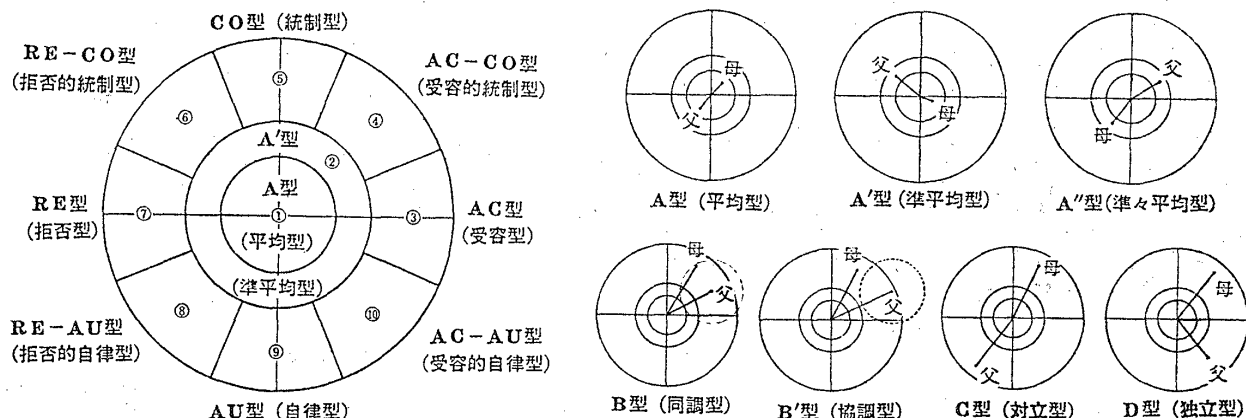


FIG. 3 10 types of parental behavior and 7 types of mutual relations between parents

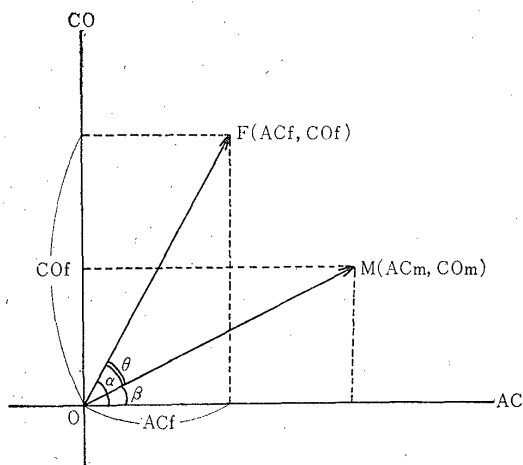


FIG. 4 Mutual relations between parents in coordinate system of the 2 second-order factor-scores: Acceptance and Control

より父親までの距離を OF 、母親までの距離を OM とする。 AC と CO の 2 因子は独立であるから、 OF と OM はユークリッド距離として、ピタゴラスの定理より算出可能である。そして、 OF あるいは、 OM の値が ① $0 \sim 0.5$ のとき A 型 (平均型)、② $0.5 \sim 0.75$ のとき A' 型 (準平均型) と定める。この基準値を満足しない残りについては、三角関数を用い以上に述べる ③ ⑩ の 8 類型のいずれかに判定する。

FIG. 4 に示したごとく、 AC 軸とベクトル OF のなす角を α 、 AC 軸とベクトル OM のなす角を β とすると、 $\tan \alpha$ と $\tan \beta$ を求めることにより、残りの 8 類型すなわち ③ AC 型 (受容型)、④ $AC-CO$ 型 (受容的統制型)、⑤ CO 型 (統制型)、⑥ $RE-CO$ 型 (拒否的統制型)、⑦ RE 型 (拒否型)、⑧ $RE-AU$ 型 (拒否的自律型)、⑨ AU 型 (自律型)、⑩ $AC-AU$ 型 (受容的自律型) のいずれかに父親と母親が判定される。

4. 組合せ類型

従来の親子関係の研究は、父および母のそれぞれについての類型化を行うものが多く、父と母の組合せ、すなわち父と母との相互関係よりの類型化を考えるものがない。そこで、次の 3 つのステップによって 7 つの類型を考えた。(FIG. 3 参照)

第 1 ステップ

単独類型の判定結果を利用し、① 父母共に単独類型で A 型 (平均型) であるものを A 型 (平均型) とし、② 単独類型において父か母のいずれか一方が A 型 (平均型) で他方が A' 型 (準平均型) であるとき、これを A' 型 (準平均型)、③ 父母共に単独類型では A' 型 (準平均型) である場合を A'' 型 (準々平均型) とした。

第 2 ステップ

第 1 ステップで、① A 型、② A' 型および ③ A'' 型が分離確定された。次に FIG. 4 で父母間の距離を FM とし、この FM の値が、④ $0 \sim 0.75$ の条件を満足するものを B 型 (同調型) とした。このタイプは、子どもに対する父母の行動の同調性が高いと考えられるもので、親子関係診断座標上の父と母の距離がきわめて近く、因子得点で $0.75 (3/4\sigma)$ 以内の場合である。テスト用紙内部で行う簡便法では、半径が二次因子段階点の 3 点以内の場合で、コンパスを用いれば、一目で判明する。

第 3 ステップ

第 2 ステップまでで、① A 型、② A' 型、③ A'' 型および ④ B 型の 4 類型が分離された。そこで第 3 ステップでは、未だに類型判定が決まらないものについて、父親と原点と母親の 3 点を結んだときに生ずる夾角 (FIG. 4 中の θ) に注目し、さらに 3 つの型を考える。すなわち、父と母のベクトルの夾角 (θ) の範囲について、⑤ $0^\circ < \theta \leq 60^\circ$ という条件を満足するものを、 B' 型 (協調型) と

よぶことにする。協調型は、既に第2ステップにおいて分離された「同調型」ほど父母間の距離が近くない型である。次に、⑥ $120^\circ < \theta \leq 180^\circ$ のとき、つまり父と母の座標が原点に関しておおむね正反対の側に位置するときを、**C型(対立型)**とし、⑦父と原点と母を結ぶ夾角が直角に近い状態を示す、 $60^\circ < \theta \leq 120^\circ$ のときを、**D型(独立型)**とする。この組合せ類型の判定は、簡便法で行う場合は、分度器を利用すればよいし、コンピュータ法では $\cos\theta$ の値により行う。なお、コンピュータ判定法では、父と母の単独類型、父母の組合せ類型の判定結果と共に、各尺度についてのコメントがカナ文字で打ち出され、全体としては FIG. 1 のようなアウトプットとなる。

結 果

TABLE 5 に本調査における全被験者(835名)を上述したコンピュータ法によって、父・母別の単独類型の各類型に占める人数とその%を、TABLE 4 には組合せ

TABLE 4 7 types of mutual relations between parents

Type	Ss	%
Average (A)	17	2.0
Quasi-Average (A')	44	5.3
Quasi-Quasi-Average (A'')	8	1.0
Conformative (B)	225	26.9
Cooperative (B')	297	35.6
Opposite (C)	92	11.0
Independent (D)	152	18.2
Total	835	100.0

類型の類型別の人数とその%を示した。

単独類型の10類型における父母間の出現率の差異を χ^2 検定したところ、 $\chi^2=55.863(df=9)$ で0.1%水準で有意であった。そこで、さらに各類型ごとに父母の間に有意差があるか否か χ^2 検定を行った。この結果は、TABLE 5 の右端に示したが、父親は母親に比べRE型(拒否型)、RE—AU型(拒否的自律型)、AU型(自律型)が多く、逆に母親は父親に比べ、AC型(受容型)、AC—CO型(受容的統制型)が多いことが明らかとなった。もっとも、各類型を定める場合の基準値をいかに定めるかについては、今後の妥当性研究との関連で判別分析法などにより、さらに方法論的に煮詰めなければならないと考えている。

考 察

類型化の作業には、3つの重要な段階があると考えられる。第1は当該研究領域できわめて安定した主要次元を確定すること。第2はその主要次元によって操作的に定義しうる類型モデルを設定すること。第3には、その類型モデルの妥当性の検証を行うことである。われわれが、本論文において展開してきた主要な部分は、その第2の段階までの研究である。本親子関係診断尺度EICAと子どもの出生順位との関係やYG性格検査との関連的妥当性などについては別の論文(辻岡・山本1977a, 山本1977)に発表した。さらに今後この類型化の臨床心理学的妥当性の研究を深めて行く必要がある。

単独類型については、10種の類型を考え、各類型に所属する率が8~12%程度を期待したが、TABLE 5 に示したごとく、かなり満足できる結果であった。そして、父親は、RE型(拒否型)、RE—AU型(拒否的自

TABLE 5 10 types of parental behavior

Type		Father		Mother		χ^2
		Ss	%	Ss	%	
Average	(A)	99	11.9	98	11.7	0.006
Quasi-Average	(A')	87	10.4	98	11.7	0.734
Acceptive	(AC)	61	7.3	100	12.0	10.455 *
Acceptive-Control	(AC-CO)	62	7.4	106	12.7	12.813 **
Control	(CO)	68	8.1	82	9.8	1.436
Rejective-Control	(RE-CO)	82	9.8	83	9.9	0.007
Rejective	(RE)	97	11.6	54	6.5	13.462 **
Rejective-Autonomous	(RE-AU)	114	13.7	65	7.8	15.024 **
Autonomous	(AU)	89	10.7	59	7.1	6.672 *
Acceptive-Autonomous	(AC-AU)	76	9.1	90	10.8	1.311
Total		835	100.0	835	100.0	

* $P < 0.01$,

** $P < 0.001$

律型), AU型(自律型)が多く, 母親は父親に比べ, AC型(受容型), AC—CO型(受容的統制型)が多い, という事実も常識的に了解しうる結果である。

組合せ類型において子どもの人格形成上最も考慮を要するのは対立型であるが, 上の単独類型の父と母の関係から推論すれば, 父がAC型で母がRE型, もしくは父がAC—CO型で母がRE—AU型の対立型が最も臨床心理学的に問題であると仮定できよう。

将来, 組合せ類型の各類型をいかなる単独類型の組合せによるかという観点から, さらにいくつかの類型に細分化することも当然問題となろう。しかし, 対立型のみについて最も単純に考えても, AC型とRE型, AC—CO型とRE—AU型, CO型とAU型, RE—CO型とAC—AU型の4種の組合せが考えられ, 父と母による組合せでこの倍の8つのサブカテゴリーが必要となってくる。組合せ7類型ごとに8個の下位類型を考慮するのみでも都合56類型が必要となり, これ以上の類型化作業はいたずらに類型の数を増すことでしかないということになる。このような作業は類型化というよりもむしろ, 臨床心理学的な個別診断の問題と考えるべきであろう。

また別の論文(辻岡・山本1977b)で論じたように, 子どもに対する父母の同調性(conformity)を考える場合に, 同調性全体は, ES(情緒的支持), CO(統制), AU(自律性)そして, AL(同調性)の4次元からなり, 第4番目の同調性因子(Alignment)は所謂狭義の同調性であり, この狭義の父母間における同調性を含めた4次元全体の広義の同調性(conformity)を考慮して始めて, 父母間の子どもに対する同調性一般をとらえることが可能となるのである。これがここでの臨床心理学的な親子関係の個別診断とよぶものである。この父母間の相互関係については上記論文(辻岡・山本1977b)を参照されたい。

本論文において採用した類型化のための基準値においても未検討の問題が残っている。すなわち, OFとOMの値を比較した際, 一方が他方に比し極端に値が小さく(原点に近く), 他方が大きい場合, 換言すれば父あるいは母が単独類型においてA型(平均型)と判定されている時でも, C型(対立型)もしくはD型(独立型)と分類されることがまれに起こる点である。このような場合, 準対立型や準独立型を考えるのがよいのか, 全く新しい基準を導入することによって, 一部の分類を修正するのがよいのかは未決定であり, これは類型化の妥当性研究によって裏付けなり改良なりをしたいと考えている。

最後に, 本論文において展開してきた類型化は, 二次因子レベルによるものであった。類型化は, より高次レベルで考えるほど容易であるが, テストで得られた情報量をそれだけ合併しすぎていることも無視できない。例えば, 本来ES(情緒的支持)とID(同一化)の尺度は, 0.568の相関を有し, CO(統制)とAU(自律性の否定)は0.342の相関を有しながらも一次独立である(辻岡・山本1976a)。ところが, 因子得点を算出する際の重みをみるとわかるように(TABLE 2), 二次因子得点のレベルではESとIDの標準得点を加えて2で除したものがAC得点にほぼ近似することになる。これは, CO因子得点についても同様である。この結果, 二次因子得点レベルでの評価には平均化傾向が混入することとなり, ESと, ID, もしくはCOとAUの尺度得点間においてかなりの得点の隔りがある場合, 問題が生ずることになる。そこで, 尺度得点そのものには多少の測定誤差が含まれていることを念頭に置いた上で, 父母別の尺度得点レベルを用いた類型化の方法を考えるのも, 上記の臨床心理学的な個別診断の点では有効な場合もおこってこよう。これらの残された問題は, 他の既発表(辻岡・山本1977a, 山本1977)において一部解明されたが, 臨床群についての将来の研究においてさらに明らかにしたいと考えている。

要 約

1. 従来の親子関係の類型化のための諸研究が概観された。
2. 親子関係診断尺度 EICA による親子関係の客観的類型化の手順が説明された。
3. ES(情緒的支持), ID(同一化), CO(統制)およびAU(自律性)の4次元について, 父および母のプロフィールと親子関係診断座標の作成法が, コンピュータによる方法とテスト用紙そのものを用いて行う方法との2法について説明された。
4. これによって, 10種の単独類型と7種の組合せ類型とが提案された。
5. 父母の組合せ類型における同調性の内容が考察された。

参考文献

- Cattell, R. B. & Tsujioka, B. 1964 The importance of factor-trueness and validity versus homogeneity and orthogonality, in test scales. *Educational Psychological Measurement*, 24, 3-30
- 古川綾子 1972 親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動測定について

- 実験社会心理学研究, 12(1), 41-52
- Heilbrun, A. B., Jr. 1964 Parental model attributes, nurturant reinforcement and consistency of behavior in adolescents. *Child Development*, 35, 151-167
- Heilbrun, A. B., Jr., Orr, H. K. & Harrell, S. N. 1966 Patterns of parental childrearing and subsequent vulnerability to cognitive disturbance. *Journal of Consulting Psychology*, 30(1), 51-59
- Heilbrun, A. B., Jr., Harrell, S. N. & Gillard, B. J. 1967 Perceived maternal child-rearing patterns and the effects of social nonreaction upon achievement motivation. *Child Development*, 38, 267-281
- 小嶋秀夫 1967 子どもによる親の態度・行動の報告: セマンティック・ディファレンシャル, 質問紙と人格要因 金沢大学教育学部紀要(人文科学編), 16, 47-61
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要(人文科学編), 18, 55-70
- 小嶋秀夫 1970 親の行動インヴェントリーの(PBI)検討——Balanced Scales——金沢大学教育学部紀要(人文科学編), 19, 129-144
- 小嶋秀夫 1971 幼児の知的機能とインヴェントリーで測った母親の態度・行動 金沢大学部紀要(教育科学編), 20, 29-44
- 小嶋秀夫 1973 母親の態度・行動と小学生のアチーブメント——探索的研究——金沢大学教育学部紀要(教育・人文・社会科学編), 22, 73-88
- Kojima, H. 1975 Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17(1), 33-48
- 三浦武・島田俊秀 1970 父—母—子関係の分析——P. C. R. T. と子どもの性格との関係——日本心理学会第34回大会発表論文集, 363
- 三浦武・森重敏・島田俊秀 1971 父—母—子関係の分析(17)——PCRT と子どもの性格との関係(2)——日本心理学会第35回大会発表論文集, 393-396
- Renson, G. J., Schaefer, E. S. and Levy, R. I. 1968 Cross-national validity of a spherical concept model for parent behavior. *Child Development*, 39, 1229-1235
- Roff, M. 1949 A factorial study of the Fels Parent Behavior Scales. *Child Development*, 20, 29-45
- Schaefer, E. S. 1965a Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424
- Schaefer, E. S. 1965b A configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557
- Schaefer, E. S. & Bell, R. Q. 1958 Development of a parental attitude search instrument. *Child Development*, 29, 339-361
- Symonds, P. M. 1939 The psychology of parent-child relationships. New York: Appleton-Century
- 辻岡美延 1964 テスト尺度構成における新しい原理——因子的真実性——心理学評論 8, 82-98
- 辻岡美延・清水和秋 1975a 因子的真実性の原理による項目分析——社会的態度測定における一結果——関西大学社会学部紀要, 6(1), 67-80
- 辻岡美延・清水和秋 1975b 項目分析における項目統計量と構成尺度の統計量——因子的真実性係数と因子的妥当性——関西大学社会学部紀要, 7(1), 107-120
- 辻岡美延・山本吉廣 1975a 斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化——親子関係診断テストについての一結果——関西大学社会学部紀要, 6(1), 53-66
- 辻岡美延・山本吉廣 1975b 親子関係の四次元——Schaefer の CR-PBI の分析——関西大学社会学部紀要, 7(1), 146-160
- 辻岡美延・山本吉廣 1976a 親子関係診断尺度 EICA の作成——因子的真実性の原理による項目分析——関西大学社会学部紀要, 7(2), 1-14
- 辻岡美延・山本吉廣 1976b 親子関係診断尺度 EICA 検査用紙および同実施手引 日本・心理テスト研究所
- 辻岡美延・山本吉廣 1977a 子どもの出生順位による親子関係と人格形成 関西大学社会学部紀要, 8(1), 103-120
- 辻岡美延・山本吉廣 1977b 父母による親子関係の認知——養育態度・行動の同調性について——関西大学社会学部紀要, 8(1), 157-170
- 辻岡美延・山本吉廣 1977c 親子関係の相互認知——小嶋氏の原資料の一分析——教育心理学研究, 25(1), 18-29
- 山本吉廣 1977 親子関係の類型と子どもの人格特性——親子関係診断尺度 EICA と YG 性格検査——関西大学大学院人間科学, 9, 51-68
- 山本吉廣・辻岡美延 1976 親子関係の類型化——親子関係診断尺度 EICA による——日本心理学会第40回大

会発表論文集, 733-734

山下俊郎・三浦武・森重敏・八重島健二・島田俊秀 1962

父—母—子関係の分析 (7)——母—子関係の因子

日本心理学会第26回大会発表論文集, 200

ABSTRACT

A TYPOLOGY OF PARENT-CHILD RELATIONS BY THE
EICA PARENT-CHILD RELATIONS QUESTIONNAIRE

by

Bien Tsujioka and Yoshihiro Yamamoto

The purpose of this study was to establish a typology of parent-child relations and father-mother relations by means of a children's questionnaire which is called "The EICA Parent-Child Relations Questionnaire."

For this purpose it was necessary (1) to confirm the fundamental dimensions of transferability between 4 kinds of the parent-child relations (son-father, son-mother, daughter-father and daughter-mother) by confirmatory factor analysis (Tsujioka, B. 1975, 1976, 1977), (2) to construct the valid scales to represent those confirmed primary factors by the principle of factor-trueness instead of by that of internal consistency and (3) to determine the objective procedure to classify the children's profiles of the test scores for its father and mother.

According to the factor structures of the factor analyses of 4 kinds of samples and also of the total sample of the above 4 samples, conformed to the two forms of the Japanese adaptation of Schaefer's Children's Reports of Parental Behavior Inventory (Form-I of 26 scales and Form-II of 18 scales), 4 primary factors: Emotional Support (ES), Identification (ID), Control (CO), and Autonomy (AU) were confirmed and the second-order factors were interpreted as Acceptance-Rejection (AC·RE) and Control-Autonomy (CO·AU).

The valid items for each scale were selected from the results of item analysis of each kind of sample in order to always satisfy the principle of factor-trueness.

The Diagnostic Chart of Parent-Child Relations consisted of the Cartesian co-ordinate system of the above 2 second-order factor-scores calculated by

computer program or manually by each child's profile in the test sheet as shown in FIG. 1 or FIG. 2.

On this chart, 10 kinds of types of parent-child relations and 7 kinds of father-mother relations could be determined either visually or by means of computer.

Attitudes and/or behaviors of every child's father or mother were classified into Acceptive (AC), Acceptive-Control (AC-CO), Control (CO), Rejective-Control (RE-CO), Rejective (RE), Rejective-Autonomous (RE-AU), Autonomous (AU), Acceptive-Autonomous (AC-AU), Average (A) or Quasi-Average (A') Type as shown in FIG. 3 and in TABLE 5.

The types of father-mother relations which were the combination types of the mutual relations between father and mother were classified into 7 kinds: Average (A), Quasi-Average (A'), Quasi-Quasi-Average (A''), Conformative (B), Cooperative (B'), Opposite (C), and Independent (D) Types as shown in FIG. 3 and in TABLE 4.

According to TABLE 5, fathers' attitudes and/or behaviors towards children tended to be more Rejective, Rejective-Autonomous or Autonomous than mothers. On the other hand, more Acceptive or Acceptive-Control Types were seen among mothers.

In TABLE 5 of the combination types, Conformative and Cooperative Types were much more dominant than other types.

In a future study this typology could be testified from a clinical point of view especially concerning the objective understandings of the relationships between the parent-child relations and the child's personality formation as Tsujioka and Yamamoto (1977a) did in other articles.